飛鳥寺釈迦三尊像の想像復元

2002年度、研究所は飛鳥藤原調査部を中心に創立50周年記念『飛鳥・藤原京展』を開催した。展示は4章構成、飛鳥時代の初期を扱った第Ⅰ章は、古墳時代末から推古女帝の時代までを対象とした。崇峻元年（588）に創建された飛鳥寺は、その歴史性だけでなく、研究所の調査研究史にも大きな意義をもっている。当然、展示でも重要なテーマとし、飛鳥大仏頭部複製品の制作、『元興寺縁起』や塔心礎埋納品の出陳などによって、広く世間に喧伝することとした。

展覧会が6月1日に大阪歴史博物館で開幕してしばらくして、博物館から連絡が入った。観覧された坪井清足元所長がいくつか問題点を指摘されたという。最も厳しかったのは、飛鳥大仏の復元図に関する指摘だった。

飛鳥大仏は、飛鳥寺中金堂にあった推古13年（605）発願（あるいは鋳造開始）の丈六釈迦如来像。完成は推古17年（609）と考えられる。現在の飛鳥大仏は、建久7年（1196）雷火で焼損したため、頭部、右手、左足などに当初の面影を残すにすぎない。

研究所では過去に2度、安居院に残る飛鳥大仏台座を調査した。1956年、飛鳥寺第1次発掘調査に先立つ予備調査として台座調査がおこなわれた。さらに同年6月、トレンチを本尊台座際に進め、それが中金堂旧土壇上に据わることを確かめた。この時、台座は花崗岩製と考えた。また、仏像両側に裳裾があたったと思えるくぼみと、その後方にほぞ穴を確認した（『飛鳥寺報告』1958）。長谷川誠氏が発表した飛鳥寺本尊の推定復元図（以下、旧案）は、これらの調査成果によっている（『年報1973』）。

その後、1984年1月、安居院本堂の部分解体修理工事にともない、台座を再調査した。石材が流紋岩質溶結凝灰岩（通称、竜山石）と判定され、また、台座上面の裳裾の痕跡とされたくぼみが、焼損による剥離や亀裂と判明した。そして、この台座は、二重宣字形台座の下座の上に脇侍が立ち、上座に本尊を安置する形式、つまり法隆寺釈迦三尊像がとる構成の原型ともいえる意匠と推定されるようになった。この成果をもとにした新たな復原案（以下、新案）は、その後、飛鳥資料館図録で公表された（伊東太作氏作図、『蘇我三代』1995、51頁）。

展覧会では当初、旧案をパネルと図録に使用した。坪井元所長の指摘は、新案をなぜ使わないのか、につきる。もっともな話だ。が、飛鳥資料館図録掲載の新案をそのまま使用するにも問題があった。脇侍像が図化されていないからだ。やむなく、浅学を顧みず復元作図を試みた。

現飛鳥大仏の衣紋が旧状をとどめるとの説もあるが、新旧両案とも復元の基本を法隆寺の釈迦三尊像（『写真測量による仏像実測図集』1975）とするのでそれにならった。左足は残るので、胡座の組み方は逆とした。台座再調査による復元宣字台に安座させると、裳裾が下框にかからない。適正な高さと判断した。

脇侍は、法隆寺例の左右を逆にした。実際に逆に装着することはできないようだが（『法隆寺の至宝　昭和資財帳3』1996）、従来から指摘されていたように、入れ替えると目線が内に向いておさまりはよい。脇侍台座は法隆寺例では板金細工の蓮花座だが、これを辛亥年銘観音菩薩立像（四十八体仏）の蓮花座を模し、茎を捻転させた。

法隆寺釈迦像の光背は、下辺が台座の上面と一致する。そのため、本尊背面に作り付けた突起で固定する方法をとっている。だが、この方法は丈六仏には採用できないし、飛鳥大仏がその痕跡を残さないのは元々なかったからだと考えた。そのため、光背の重量を台座の下座がうける形式とし、光背を大きくした。光背の文様はほとんど法隆寺の引き写し。新案は戊子年銘小金銅仏の光背紋様とするが、法隆寺薬師像も、蓮華紋・重圏紋・輻射紋の構成をとるのでこれを採用し、外側は戊子年銘仏の紋様をアレンジした。光背の高さは、中金堂推定内陣高におさまるよう、蓮華紋心を白毫に合わせた。

台座周囲には須弥壇を想定した。宣字形台座下框の高さが21cm、台座の厚みが70cmあるので、須弥座から台座が27cmほど露出するように、須弥壇高を43cmとみた。須弥壇は、坂田寺金堂（奈良時代）の例を参考にした。坂田寺例は側面しかわからないが、正面を、中央4間6尺間隔、両脇各5尺、束幅中央9寸、他7寸とみて、正面全長34.7尺（10.4m）と推定できる。飛鳥寺中金堂は、須弥壇正面幅を確定できなかったので、脇を無視して中央三間を6尺等間とみた。格狭間の紋様は、辛亥年銘観音菩薩立像のものを借用した。

このように推測作図してみたが、新たな「捏造」とよばれること、そして仏罰を恐れる。　（花谷　浩）

図12　飛鳥寺釈迦三尊像想像復原図　1：35